

番外編

教養講座 地元学と考える

「いいな広野わが町発見
—ふるさと創造・映像教育プロジェクト—」

映像制作授業 開催の報告

2015年7~8月実施

作映画を発表してきました。

平成二十年度制作「光の道導」、平成二十一年度制作「青の道」は、福島市の中高生を中心に障がい者や一般ボランティアの皆さんと、一年を通して一本の映画を作るというワークショップを行い、シネリテラシーの実践・研究をしており、参加者の子ども達の成長ぶりを目の当たりにしてきました。

第百四十四回地元学(十二月)講師の千葉茂樹氏が関わられた「ひろの映像教育実行委員会」が今年の夏に広野町で開催されました。日本映画学校の卒業生でシャロームのスタッフ・佐藤憲吉さんによる報告を番外編として掲載いたします。

NPO法人シャロームでは、シネリテラシー第一人者の日本映画大学特任教授である千葉茂樹監督と共にシネリテラシーの実践・研究を行ってきました。映画制作ワークショップ「夢をかたち」として、シネリテラシーを軸とした映画制作ワークショップの実践(平成二十年)。自主制

「ひろの映像教育実行委員会」会ふるさと創造学映像授業として広野中学校にて七月十四日、八月二十四日から八月二十七日の合計五日間で、広野町での複数のテーマによるドキュメンタリー映画を作ることとなりました。作品の長さ、目安は五十分。生徒が特定の人物を取材し、その人物の語り(あるいは語り合い)を伝える作品とすることを目標としています。また、その

人物(取材対象者)を通じて、あるいは、その人物と取材する生徒たちの関わり合いを通じて、ふるさとについて考えるきっかけとなるような作品を作ることも目的のひとつとなります。

六班に分かれ、それぞれのテーマ毎に作品を作り上げます。私の担当は、「火力発電所」というものでした。子ども達はとてもやんちゃな子が複数集まり、先生方も私の班は一目置くような班で、担当の先生も講師である私に事あるご

とに「すみません」と子どもに代わって謝っていたのですが、私は指導に来ているのだから別に問題はないのですが、先生という立場から、私が生徒を「叱る」行為は、普段指導している自分の責任と感じたからなのでしょう。

何を叱ったかという点、遊びと真剣に映画制作に取り組む時間とのメリハリが出来ないこと。特に他の仲間が真面目に考えている時にふざけている生徒には、きちんと何故ふざけることが悪いことなのか、真面目に頑張っている仲間に対して失礼になるということなどを丁寧に説明し、理解してもらうことが必要でした。

仲間と共同でひとつの作品を作り上げる上で、そういった相手への思いやりを持つて、お互いに接することができるコミュニケーションを養ってほしいと思います。そして、実際にそれは、今回の授業でも学ぶことが出来たはずですよ。

それは出来あがった作品に出ていると思います。十二月十九日、「地元学を考える」にて千葉茂樹監督が「いいな広野わが町発見—ふるさと創造・映像教育プロジェクト—」をテーマに講演されました。

これからもシャロームでは、シネリテラシーの実践を行っています。皆様もぜひシャロームで映画作りを私たちと一緒にやってみてください。シネリテラシーを体感しているかどうでしょうか。(シネリテラシー担当・佐藤憲吉)



▲参加した学生さんたちと。映画制作を通じて仲間への思いやりを学びました。

映画作りはコミュニケーション能力が養われると言われますが、コミュニケーションというのは、相手手を思いやる気持ちがあるて初めて成り立つものです。コミュニケーションは、その相手

教養講座 地元学と考える

第百四十五回予告

中日友好と祖母李徳全

<講師> 羅悠真さん (中国・日本関連民間協会 代表)
<日時> 2016年1月30日(土) 13:30~15:00
<会場> まちなか夢工房2階 <参加費> 500円

<講演内容>

李徳全(り・とくぜん)女史は、今回の講師、羅悠真氏の祖母にあたります。太平洋戦争の後、李徳全女史が日本人捕虜を無条件で開放したという逸話が残っています。開放された人びとの中には、現在の日本の主要な人物へと繋がる日本人もいたそうです。戦後の隠れた日中間の歴史について、また、今後の日中の在り方についてお話いただけます。

*参加人数把握の為、地元学講座各回ごとに出欠のご連絡をいただければ幸いです。(tel 024-524-2230 または fax 024-525-8285 までお願いいたします)